



ふ  
おん・しいほるとの娘  
(上)

吉村  
昭

ふぉん・しいほるとの娘(上)

昭和五十三年 二月二十日 印刷  
昭和五十三年 三月一日 発行

著 者 吉村 昭

編集人 吉田 掟二

発行人 高原 富保

発行所 毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋

〒550 大阪市北区堂島

〒812 北九州市小倉北区紺屋町

〒460 名古屋市中村区名駅

印刷 図書印刷

製本 佐久間製本

ふおん・しいほと  
の娘  
(上)



文政六年七月三日朝

野母の遠見番所で、若い遠見番が膝をついて海に眼を向けていた。

野母村は長崎から西南方向に長く突き出た半島の先端に位置し、遠見番所は、岬にある権現山の頂きに設けられている番所は一間半（二・七メートル）四方の小さな建物だが、海上を遠くまで見渡すことができ、晴れた日には南は薩摩、西は平戸五島まではっきりと見える。

野母遠見番所は、日本で唯一異国に開かれている長崎港への異国船の出入りを監視する場所であった。

異国船と言っても、公に許されているのは唐船（中国船）とオランダ船のみで、唐船は春、夏、秋に計十艘、オランダ船は夏に二艘を限度として来航していた。遠見番は、野母村に住む視力のすぐれた十名の男たちがえらばれ、五人ずつ十日交代で詰め、また水主十名も四人扶持の手当をうけて番所に召し抱えられていた。

その日は晴れていて、白雲が北の空に流れているだけであつた。

霧のかかっている日は海上が見えないので海岸にある霧番

所へ移動するが、雨の降ることはあっても霧の湧く日は少く、雨の降ることはめつたになかった。

一人が海上の監視にあたったり、また、所々で

番所には高札が立てられていた。そこには、油断なく勤務に重にし飲酒、遊興、賭博を禁じ、女はもとより遊者を立ち寄せぬように、と書かれ、それに違反した者は罰に処する旨が記されていた。つまり食事の間も、監視の役目を怠ると罪に問われるのである。

海上に眼を向けていた遠見番の男は、番所にそなえられている三挺の遠眼鏡のうちの一つを手にし、それを西北の方向に向けていた。

かれは、かなり前から海面に白く波立っている部分をながめていた。白波は魚が群れていることをしめすもので、その附近に雪片のように舞っているのは魚をねらう海鳥であった。かれは、遠眼鏡をその部分に向けていた。

海面が朝の陽光にまばゆくかがやき、場所によっては乱反射を起して朱色の光をはなっている箇所もある。海面には、多くの鳥が波に上下しながら浮んでいるのもみえた。

空腹感が、かれを苛立たせていた。冷飯の茶漬に香の物で朝食をとっている同僚たちの姿が想像された。

かれは、海面を見ることにも飽いて、遠眼鏡から眼をはな

すと沖をながめた。海は、<sup>ふ</sup>屈いでいた。

不意に、かれの眼が大きくひらかれ、口から短い叫び声もれた。

かれは、遠眼鏡をつかむと西南の方向に向けた。

「白帆だ」

かれは、叫んだ。

三本マストの大きな帆船が、野母岬に舳をむけて進んでくる。船体は黒く、マストには旗がひるがえっている。距離は遠く、旗がオランダ国旗の三色旗であるかどうかはわからなかった。

かれは、遠眼鏡を置くと番所を飛び出し、山道を駆け下った。二町ほどくだった所で、朝食を終えて雑談しながら道をのぼってくる同僚たちに出会った。

男の説明に顔色を変えた遠見番たちは、競うように山道を駆けのぼった。そして、番所に走りこむと遠眼鏡をとり上げ、西南方の海上を見つめた。旗は三色旗のようだが、確実なこととはわからない。

「白帆注進だ」

遠見番の統率者である舳頭が、男たちに命じた。

二人の遠見番が狼煙台に走り、他の一人は「帆船見ゆ」の白旗を高々とかかげた。遠見番は最初に見つけた若い遠見番は、

につたえるよう命じた。

狼煙が、あがった。黒煙が空に立ちのぼり、わずかに微風をうけて北に流れてゆく。

狼煙役の遠見番は、北北東の長崎湾口にある小瀬戸<sup>こせと</sup>の方向を凝視していた。そこにも遠見番所が設けられていて、野母番所<sup>おぼ</sup>にあげられる狼煙と白旗を終日注視しているのだ。

「受けてくれた」

狼煙役が安堵したようにつぶやき、舳頭に報告した。

小瀬戸番所に細い狼煙が立ちのぼり、白旗があがった。それは、野母番所にあがった白帆発見の合図を確認したことをしめすものであると同時に、長崎の町に近い十善寺村の海浜にある番所につたえ、さらにそれは上築後町観音寺の番所へと中継されて長崎奉行所に急報されるのである。

野母遠見番所の者たちは、沖を凝視した。弱風なので船の帆はしおれ気味で速度もおそいが、風は強い風で帆は正しく船体と直角に掲げられていた。

遠見番たちは、御注進船が出るのをたしかめ、野母村の海を見下していたが、しばらく

村の深い入江から出て長崎湾に注ぎ込む。御注進船は、小瀬戸の細い海峡を抜けて、野母村の海に注ぎ込む。御注進船は、小瀬戸の細い海峡を抜けて、野母村の海に注ぎ込む。御注進船は、小瀬戸の細い海峡を抜けて、野母村の海に注ぎ込む。

次第に近づいてきた帆船のマストに三色に染めわけられたオランダ国旗がかかげられているのが確認

でき、遠見番たちは遠眼鏡を桐箱におさめ山道をかけ下った。海岸で帆船を近々と監視し、それを奉行所へ通報しなければならぬのだ。

かれらが、息をあえがせて海岸に赴くと、そこには庄屋をはじめ多くの村人たちが集っていた。かれらの顔には、年に一度やってくるオランダ船を見たという好奇の色がうかんでいたが、同時におびえの表情もみられた。オランダ船の来航は年中行事の一つにひとしいもので、かれらはそれを見物することを楽しみにしていたが、文化五年以来、かれらの心情は複雑になっていた。

その頃、ヨーロッパでは著しい情勢の変化が起っていた。フランス皇帝の座についたナポレオンが、ヨーロッパ諸国を侵攻、文化三年にはオランダをフランスに併呑した。その虚をついてフランスと敵対関係にあったイギリスは、強大な海軍力を駆使してオランダ領植民地を侵略し、それは東洋の植民地にも及んでいた。

長崎の出島に設けられていたオランダ商館は、微妙な立場に立たされていた。幕府は、オランダ一国のみに貿易の許可をあたえていたが、オランダそのものは国家として消滅してしまっている。オランダ国旗がひるがえっているのは、世界で長崎の商館のみであった。当然のことながら、長崎へはオランダ船の入港はなく、世界情勢にうとい幕府は、わずかにその現象に疑惑の念をいだいているに過ぎなかった。

商館長ヘンデレキ・ドウフは、オランダがフランスの属領

になったことを幕府にさとられまいと腐心していたが、文化五年（一八〇八）八月十五日、突然オランダ国旗をひるがえした帆船入港の報を得て喜んだ。

しかし、それはオランダ船を装ったイギリス軍艦「フエートン号」で、連絡のために小舟で同艦にむかった二人のオランダ商館員が、艦の乗組員によって荒々しく捕えられた。そのうちの一人は間もなく釈放され、イギリス軍艦の艦長の書簡を持ち帰った。それには、オランダ船の拿捕を目的に入港したが、船影を認めぬので立ち去ること、その条件として薪水と食糧の補給を求め、それを日本側が拒んだ場合は、港内の日本船、唐船を一艘残らず焼き払うと記されていた。

長崎奉行松平図書頭は激怒したが、商館員の生命の安全を説くドウフの懇願をうけ入れて、水、食糧を艦に送り、残りの商館員一名を救出した。図書頭は、「フエートン号」を攻撃する準備を急がせたが、翌日、「フエートン号」は急に碇をあげて港外に去っていった。図書頭は、責任を負って、翌朝、切腹して果てたのである。

ナポレオンの敗北によって再び独立国としての權威を回復したオランダから帆船が長崎にやってきたのは、それから九年後の文化十四年七月であった。そして、その後、オランダ船は毎年六月から七月にかけて長崎に入港してくるようになっていた。しかし、フエートン号事件以後、長崎奉行所は、帆船の入港に一層嚴重な監視の眼をそそぐようになった。三色旗をひるがえしていてもオランダ船を装った他国の船であ



る可能性もあるし、暴挙をほしきままにするかも知れないと判断していた。そして、そのような奉行所の態度は一般の者にも影響をあたえ、オランダ船を見る眼も変ってきていた。

五ツ（八時）過ぎ、野母の鼻と呼ばれる岬の先端を大きく迂回するように、オランダ船が姿をあらわした。三本マストにはすべて三色旗がかかげられ、船尾にも大きな三色旗が垂れている。風が幾分出てきたらしく、帆はふくらみをおびていた。

触頭は、待機していた二艘目の御注進船に、帆船がオランダ国旗をかかげている旨を長崎奉行所に伝えさせるため至急出発することを命じた。

五人の水主は、櫓にとりつくと、

「オッシャリン、オッシャリン」

と、甲高い掛声をあげて櫓を素速くあやつり、長崎湾口にむかって去った。

大型の帆船は、野母村の前面の海にかかる、帆をおろし停止した。以前は、長崎湾の入口に近い祝島（伊王島）附近まで進んで奉行所側の臨検を受けたのだが、フエートン号事件以来、野母村附近で役人の来着を待たねばならない定めになっていた。

帆船は、碇を投げたが、海は深く海底に達しない。そのため小さな帆をあげて、潮に流れぬよう操船していた。その日、帆船は、野母村前面の海上にとどまったまま役人の到着

を待っていたが、奉行所側からの船は姿をみせなかった。夜になると、遠見番たちは篝火を焚き、遠くの海岸や丘陵の番所でも火がさかんにあがるのがみえた。

翌七月四日朝、三艘の和船が長崎方面からやってきた。その船には、長崎奉行所の沖出役の役人たちがオランダ通詞とともに乗っていた。帆船に乗ってきた役人の顔には緊張した表情がうかび、通詞の通訳で「旗合わせ」をおこなう旨が船長につたえられた。

それは入港してくる船がオランダ船であることをたしかめるための方法で、例年おこなわれている慣習であった。毎年秋、オランダ船は東洋貿易の根拠地であるバタビヤに帰るが、その直前に奉行所で同種の秘密の旗を二つ作る。それを年番大通詞が封印して、一つを奉行所に保管し、他の一つを奉行所からオランダ商館長に渡す。商館長は、その旗をバタビヤに帰る船の船長に託し、翌年長崎にやってくるオランダ船に携行させる。そして、それが奉行所で保管してある旗と同種のものであることがたしかめられれば、その帆船がまちがひなくオランダ国籍の船であることが確認される。

役人と船長が、それぞれ桐箱を持ち寄り、同時に封印をとき、中から旗をとり出して照合した。その結果、全く同種のものであることが判明し、旗合わせは無事に終了した。

役人は、ついで船名、船長、同乗者の名簿の提出を求め、通詞の協力でそれを書きとめた。船名は、デ・ドリー・ベジュステル号、船長エー・ヤコメッティで、同乗者は新任の

商館長デ・スチュレルと商館の医員として赴任してきた陸軍外科少佐フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト等であった。

「ふおん・しほる？」

役人は、商館長の傍に立つ背の高い青年に眼を向けた。青年は、表情もくずさず役人に眼を向けていた。

意外なことに船内に二十四名の日本人がいることが、ヤコメッティ船長からつたえられた。

役人の顔は、こわばった。鎖国政策をとっている幕府は、日本人の海外渡航を禁じている。それは、密貿易を防止するというよりは日本にキリスト教が入ることをふせぐための処置であった。そして、幕府は船を外洋航海に適さぬ弁才船に制限し、新式の航海術の普及をも許さず沿岸航海しかできぬよう仕向けていた。しかし、そうした処置は船の難破を誘発させ、多くの船は潮流に押し流されて、カムチャツカ、アリユーション、アメリカ、東南アジア方面へ漂流した。

それら漂流の中には異国船によって送り還される者もいたが、異国船はその代償として幕府に貿易を強く求めるのが常であった。帆船がオランダ船なので貿易を強要することはないが、どこの国から送り還されてきたのか、またはそれら漂流民がキリスト教信者になっていないかなどというわずらわしい吟味が必要になる。

しかし、船長の説明をきいた役人の顔に安堵の色がうかんだ。船長の話によると、六月二十八日、玄海灘で漂流中の日

本船を発見した。それは鹿児島藩主松平豊後守の手船「神通丸」(十八人乗り)で、琉球で砂糖を積んで帰る途中、鬼界島で上林藤次郎ら六人を乗せて薩摩に向ったが、大時化にあつて破船した。船は楫を失い、帆柱も切り倒した坊主船になつて漂流していたため、オランダ船からボートをおろし全員を収容したのだという。

役人は「神通丸」の船頭橋口武兵衛門を訊問し、ヤコメッティ船長の説明と全く同一の陳述を得たので疑惑をとき、船底に謹慎しているよう申しつけた。

また船長は僚船として「オンデル・ネーミング号」をともなってきたが、野母崎にむかう途中で見失ったことも告げた。役人は、これらの報告を受け長崎湾外の祝島まで進むことを許した。帆が張られ、船は北にむかってゆつくりと進み祝島の北端をまわった。その時、奉行所の和船が近づき、役人が通詞とともに乗りこんできて土官一名を人質として連れ去った。

船はさらに進んで湾内に入ったが、長崎に直接入港することとは許されず高鉾島に繋がれた。港内の警戒は厳重をきわめ、一方の岸には鍋島藩、他方の岸には黒田藩の営所がそれぞれ設けられ、幔幕を張りめぐらし大筒の砲口をオランダ船に向けていた。またその後詰として大村、五島、島原、唐津、久留米、柳川、肥後、薩摩、平戸、中津、長門、松山など十七藩の藩兵がひかえていた。

異国船は、たとえオランダ国籍であることが確認されても、

長崎港の出島に到着するまでは敵船として扱われる定めになっていた。オランダ船の周囲には三百石積みの軍船や四十二挺櫓の軍船十数隻が旗印をなびかせ、夜になると海岸に篝火が至る所に焚かれ、軍船にも提燈がかかげられていた。

翌早朝、行方のわからなかった僚船の「オンデル・ネーミング号」が無事に湾内に入ってきて、「デ・ドリー・ベジステル号」の傍に投錨した。

湾内に朝の陽光があふれた頃、海岸の各方面からおびただしい数の小舟がオランダ船にむかって集ってきた。それは奉行所の命令をうけた三百艘の舟で、恒例によってオランダ船を港内に引き入れる役目をあたえられていた。

舟の集合が終ると、「デ・ドリー・ベジステル号」に二本の太綱が結びつけられ、百五十艘ずつの小舟が左右に二列につらなつた。そして、合図とともに各舟の水主たちは櫓をいっせいにこぎはじめ、オランダ船の港内への曳き入れにかかった。太綱が強くはられたが、オランダ船は強い逆風を船体にうけて進まない。そのため作業は中止され、入港を翌日にのばしたが、その日も曳航に失敗し港外に碇泊した。

七月七日、風もおとろえ、「デ・ドリー・ベジステル号」は三百艘の小舟に曳かれてゆっくりと港内に入ってきた。それは、多くの人々のつかむ綱にひかれて動いてくる華麗な山車のようにもみえた。

長崎の町の海岸には、オランダ船の入港を眼にしようとする人々がむらがり丘陵にも港を望む人の姿がみえた。しかし、両

岸の警備は物々しく砲口は一斉にオランダ船に向けられ、港内にも旗を林立させた軍船が藩兵をのせてオランダ船とともに移動していた。それは、華やかな情景であったが、曳航されている間、船内ではオランダ人探りと称する検査がおこなわれていた。密貿易の防止という名目で、積荷の調査がすみめられると同時に商館長をはじめオランダ人全員の徹底した身体検査がおこなわれていた。オランダ人たちは、余りの苛酷な処置に顔色を変えていた。

しばらくするとオランダ人探りが終り、役人が検査鉦を鳴らした。それを耳にした三百艘の和船を操っていた水主たちはあわてて舟を綱からはなし、先を争って海岸へ引き返してゆく。入港時にオランダ船が放つ号砲の轟音をおそれているのだ。

船に帆が張られ、自力で港内を進みはじめた。船内では、オランダ人が、

「打ちます、打ちます」

と、妙な訛のある日本語で数度ふれてまわった。

役人たちは、持参してきた絹の布を腹にかたく巻き、まとめた紙を耳の孔に詰めた。

やがて号砲が轟然と放たれ、それは空気の層をたたいて長崎の町をふるわせ丘陵にいんいんと木魂していった。船はゆるやかに進みながら号砲を放ち、それは九発に及んだ。海上には濃い硝煙が流れた。

船は出島に近づき、帆をおさめると碇を投げた。それによ

って日本側はオランダ船を敵船扱いすることをやめ、海岸その他にしかれていた陣も解かれ、オランダ船をとりまいていた軍船も岸に引き返していった。

しかし、オランダ船に対する警戒は解除されず、監視の番船はそのまま周囲に配置されていた。そして、まず役人の指図によって船内の鉄砲、火薬その他兵器に準ずるものをすべて陸にあげ、奉行所の御焼硝蔵<sup>ごしょうじやう</sup>の中におさめた。ついでオランダ船の帆を封印し、櫓・樯をはずさせて陸揚げさせ、奉行所に保管した。これらの処置によってオランダ船は無装備になり自由に行動することは不可能になった。

その作業が終ると、伝馬船にオランダ商館長が奉行所の役人、通詞とともに乗って船に入った。そして、入念に船内を調査し不審な物がないことをたしかめて、ようやく入港手続の終了を告げた。それらの手続の中で役人に不審感をいだかせたのは、新任の商館長スチュルレルに随行してきたシーボルトという外科少佐の口にするオランダ語であった。

役人は、通詞を介してシーボルトに種々な質問を発したが、通詞はシーボルトがオランダ人としては会話が下手だと主張した。日本への入国はむしろオランダ人と中国人にかざられているのだが、通詞は、シーボルトがオランダ以外の国籍をもつ人間ではないかと疑っていた。

通詞の直感的中していた。

シーボルトは南ドイツのウエルツブルグに生れたドイツ人であり、オランダ人であると偽って日本への入国を果そうとして

いたのである。

シーボルトは、日本のオランダ通詞が自分よりも滑らかにオランダ語を話すのに狼狽したが、通詞たちがヨーロッパの地理に乏しい知識しかもっていないことを利用し、オランダ人の多くは低地オランダ人だが、自分は高地に住むオランダ人で言語も少々異っていると弁明し、国籍の発覚をまぬがれた。

その日、伝馬船で商館長スチュルレルら一部の者が出島に上陸した。スチュルレルは、それまで六年間商館長であったブロムホフと交代するために赴任してきたのである。

スチュルレルらは、出島の名をよく知っていた。それは、これらの間で国立刑務所 (*Stadsgevangenis*) と呼ばれていた島であった。出島は、寛永十三年 (一六三六) に海を埋立てて作った人工島である。それは、長崎市内に住んでいた南蛮人と言われていたポルトガル、スペイン人を収容するためのもので、出島は南蛮屋敷と称されていた。

翌々年、鎖国令が発せられ、幕府はキリシタン禁制によって南蛮人の退去を命じ、もしも再び渡来した折には船を焼き払い乗員を一人残らず斬罪に付すと通告した。出島は無人となり貿易は平戸におかれたオランダ商館のみにかざられていたが、寛永十八年に商館が出島に移ってきて、出島は阿蘭陀<sup>オランダ</sup>屋敷と称されるようになったのである。

出島は、総面積三、九六九坪余、陸に向った部分は九十六間 (一七三メートル)、海に向った部分は百十八間 (二二二メー

トル)の長さで、洋風の建物が立ちならび、オランダ国旗の三色旗がひるがえっていた。島はすべて高い板塀でこまれ、海側に荷物を船から揚げる小門があったが、それは必要な時をのぞいて常にかたく閉ざされていた。外部との交渉は極度に制限され、島と陸地の連絡は石橋のみで、しかもその附近の海には小舟を接近させぬ標識として十三本の杭が打ちこまれていた。

石橋の南口には正門があつて番人が立ち、鑑札のない者の入島を禁じていた。

また探番と称する小役人が門内に詰めていて、奉行所役人通詞、出島係の乙名(町役人頭)以外の者に対して入念に衣服、身体を探索した。むろんこれらの処置は、オランダ人と一般人の接触を避けさせることによって密貿易とキリスト教を封ずるためであつた。

正門の傍には、禁札が建てられていて、そこには、

### 禁制

- 一 傾城(遊女)之外女人入(る)事
- 一 高野ひじりの外 出家山伏入(る)事
- 一 諸勸進之者並(に)乞食入(る)事
- 一 出島廻り傍示木杭の内船乗廻(し)候事
- 附 橋の下船乗入(る)事

一 断(り)なくして阿蘭陀人出島より外へ出る事

右条々堅く可相守者也

と書き記されていた。

この禁札にもあるように、原則としてオランダ人が出島から外へ出ることは厳禁されていた。わずかに年に数回、長崎の町や郊外に散策することが許されただけであつたが、その折にも監視の役人がつき自由な行動は許されなかつた。

……出島は、オランダ船の入港によって明るいにぎわいつつまれた。

その夜、歓迎宴の準備があわただしくすめられ、下僕は豚小舎で屠殺した豚を調理場にはこびこみ、料理人は菜園でとれた野菜をきざみ、酒をととのえチーズを皿に盛つた。商館員にとつて、オランダ船の入港はなつかしい祖国の空気にふれることでもあつた。

長崎の町にも、活気があふれていた。

オランダ船の積荷は、砂糖、白檀、毛織物、サラサ、金巾、ガラス製品、時計、眼鏡など種類も多く、それらは指定された商人によつて扱われ利益金を幕府に納める仕組みになつていた。

長崎に他国から集つてきていた商人の動きも活発で、花街のある丸山の灯も一段と明るさを増していた。

丸山遊廓は町の南に位置し、丸山町、寄合町の二町で構成され華麗な遊女屋が数多くならんでいた。一万坪にも達する遊廓は土塀でこまれ、入口の大門は北側にひらいていた。オランダ船が出島に着いた日の翌々日から福濟寺、清水寺

に千日参りの人々が集り、丸山の遊女屋も夜を徹して店をひらいた。

そして、それが終ると町には盆を迎える準備がにぎにぎしくはじめられた。

十三日の夜、人々は家々の門に家紋をつけた燈籠をかがげ、翌日には丘陵一帯に点在する墓所へのぼってゆき、墓所に多くの燈籠を幾層にもつらねた。やがて日が没すると一斉に灯が点ぜられた。長崎の町をかこむ丘陵は無数の灯でおおわれ、その華麗さは人々の眼をうばった。

さらに翌十五日夜には、竹と藁で作った多くの精霊船しんりやうふねが海面に流された。船にのせられたさまざまな燈籠の灯が港内を光の海に化し、町の中にはお囃子の音がみちた。

丸山は、日本でも屈指の規模をもつ遊廓で、美しい遊女の多いことでも知られていた。

また他に類のない性格をもった遊里であることも際立った特色であった。

それは、遊女が日本行き、唐行き、オランダ行きの三種に分けられていたことである。日本行きは日本人のみを相手とする最上位の遊女で、唐行きは唐人のみ、オランダ行きはオランダ人のみにふれる女たちで、その区別はきびしく守られていた。

唐人たちは長崎の町の中に住んでいたが、オランダ人が出島に幽閉状態におかれていたのと同じように、周囲を土壁でめぐらし外部との接触を断たれた唐人屋敷内で生活していた。

唯一の出入口である大門の傍には役人、通詞、遊女以外の出入りを禁ずるという禁札が建てられ、番人によって監視されていた。

オランダ人、唐人にとって、遊女とふれ合うことは淋しさをまぎらす最大の歓楽であると同時に外部の空氣にふれる機会でもあった。

盆盆が過ぎたが、長崎の町にはそれにつづく送念仏、二十  
六夜待などの行事のにぎわいがつづいた。

そうした中を、丸山の大門から一挺の駕籠が出て石段の多  
い道をゆっくりとくだっていった。夕立が通りすぎた後で道  
路は濡れていたが、路面から立ちのぼる水蒸気で蒸暑い。駕  
籠の後を禿がつき従っていたが、白粉の塗られた顔にも首筋  
にも汗が光っていた。

駕籠は銅座町をぬけると出島の大門に向い、門の前にある  
江戸町の仲宿前であまった。

駕籠の中から遊女が出てくると、軒をくぐった。長崎の遊  
女の衣裳は天下随一といわれていたが、仲宿に入った若い遊  
女の衣服も飾物も殊に華麗をきわめた。髪にはたいまいの  
弁・かんざし・櫛に銀のかんざしがさされ、衣服は藤色の  
地に銀糸の刺繍がほどこされていて、前に結ばれた帯には珊  
瑚珠がちりばめられていた。

遊女は、町役人に鑑札を出し深々と頭をさげた。容貌は、  
きわめて美しかった。顔立ちは小造りで、目鼻だちがはつき  
りと整っている。眼は澄み肌理はこまやかで、黒々とした髪  
の生え際が新茶のような淡緑色をおびていた。遊女としての

たしなみか、顔に汗もうかべていない。わずかに首筋に光る  
ものが湧いていたが、それは細い首筋をなまめかしいものに  
みせていた。

町役人は鑑札をあらため、筆をとると出島への出入者をし  
るす帳面に、

寄合町引田屋卯太郎抱

其 扇 拾七歳

と、書きとめた。そして、筆をおくと其扇の美しい顔に  
視線を向けた。

探番が町役人に一礼し、其扇に近づくと「探り」をはじめ  
た。手が素早くのび、其扇の衣服の中をさぐる。周囲をまわ  
って髪を見まわし、帯に手をふれた。その間に他の探番が其  
扇の連れた禿にも同様の探りをし、それが終ると、

「改めましてございます」

と、町役人に頭をさげた。

其扇と禿は役人に頭をさげ、探番の後について仲宿を出た。  
そして、道をへだてて出島に架けられた石橋を渡っていった。  
潮は満ちてきていて、橋の下には淀んだような海水がひろが  
っていた。

橋を渡り終ると、扉の閉ざされた大きな門が行手をさえぎ  
った。探番が門の傍に詰めている町役人に探り改めが終った  
ことを報告すると、役人は番人にくぐり戸をあけるように命  
じた。

其扇は再び役人に頭をさげると、ゆっくりした足どりでく

ぐり戸をくぐった。

其扇は本名をたきと言ひ、滝という字をあてることもあった。先祖は野母の人で、その後、代々長崎の銅座跡（銅座町）に住居をかまえていた。

父佐兵衛が三十一歳、母きよが二十五歳の年に、たきは四番目の娘として生れた。姉はつね（お寛、よね、まさ。彼女の下に善四郎という弟と、さだ、ふみの二人の妹がいた。

父の佐兵衛は銅座跡でコンニャク商を手広く営み、奉公人も数多く使っていた。が、数年前、手ちがいが生じて借財をし、その後、商売も思わしくなく家も人手に渡るといふ悲運に見舞われた。七人の子供をかかえた佐兵衛は再起をはかることに努めたが、徒勞に終つて裏店に住む身になった。

万策つきた佐兵衛は、長女つねを遊女奉公に出した。つねは、収入の多いオランダ行き（オランダ）の遊女になつて出島へ出入りする身になった。源氏名を千歳と言つた。

つねは美しい女であつたが、たきは、さらに美しかった。

少女の頃から近隣でも評判で、丸山の遊女屋の中で最も格式の高い引田屋から奉公に出るよう強ひすすめがあつた。そうしたことから、たきもつねについて遊女になり引田屋卯太郎抱になつた。十五歳の年で、其扇という源氏名がつけられた。むしろ其扇は、遊女奉公に出されることを悲しみ、死ぬことも考えた。が、彼女がそれを承諾したのは長姉のつねのことが念頭にあつたからであつた。つねは、家の犠牲になつて

遊女になつた。長女としての責任感からであつたのだろうが、つねの得る収入によつて一家は辛うじて飢えることもなく日を送ることができた。そうしたことを思うと、引田屋からの誘いを拒むことはできず自分も姉のつねと同じように家を助けねばならぬと考えたのである。

「お前は、遊女などにならなくてもよかったのに……」

たきが引田屋抱になつた時、つねは肩をふるわせて泣いた。たきは其扇として出島へ出入りするようになったが、オランダ人と接することに強い嫌惡を感じていた。

オランダ人は、西洋の文物、知識を導入し経済的に町をうるおす貴重な存在として温く遇されていた。他の地方では異国人を獸類にひとしいものとして蔑視していたが、早くから異国と接触のある長崎の人々にはそうした傾向は淡かつた。

しかし、それは表面的なことで、男と女として接する場合には、大きな異和感があつた。其扇にとつて、オランダ人の体は薄気味悪く、不快であつた。脂ぎつた赤い皮膚、全身をおおう生毛、茶または青みをおびた瞳、異様な体臭。それらの特徴をもつオランダ人を、彼女は、人間のようにとは思へなかつた。

それから二年がたったが、彼女には、むしろオランダ行きの遊女になつてよかったと思うようにもなつていた。日本人相手の遊女よりも、オランダ人相手の方が遊女として恥じる度合も少いように思えた。人間ではない、人間の形をした動物だ、と其扇はオランダ人と接する度に眼をかたく閉じてつ



ぶ、やきつづけていた。

そのような生活の中で其扇の容貌は一層美しさを増し、いつの間にかオランダ人と優美な仕種で握手をし、接吻も巧みになった。

出島では、オランダ語以外にマレー語も使われていた。それは金銭で東南アジアから買われてきた下僕たちがマレー語を話すためで、日本語、オランダ語、マレー語の三つが混合して使われていた。其扇は言葉に敏感な性格で、おぼつかないオランダ語も断片的に口にするようになっていた。

遊女の中には定ったオランダ人のもとと肉体関係をもつ遊女も多かったが、其扇は姉の千歳と同じように定った男はいなかった。それは身を拘束されずにすむことで、彼女はそれを好都合だと思っていた。

出島の門をくぐった其扇は、禿<sup>かぶ</sup>とともに広い道を歩いて行った。西の方向で遠雷の音がしている。

道の左側は菜園になっていて、日本ではみられぬ西洋の野菜が栽培されていた。右方の建物の屋根の上にはオランダ国旗の三色旗がみえたが、微風にわずかにゆれているだけであった。出島には、商館長をはじめ主だった館員たちの居宅や玉突場、倉庫、豚舎など六十五の建物がならび、ほとんどが二階建て、木造の洋館であった。

七月七日にオランダ船が入港して以来、新旧商館長を中心に数度酒宴がひらかれ、其扇も出島へ招かれることが多くな

っていた。時には、姉の千歳と顔を合わせることもあった。

千歳は今でも其扇を痛々しそうに見つめ、体に故障はないかといったわるように低い声をかけてきたりする。姉はいつの間にか出島の空気になれきっているらしく、巧みにオランダ人の宴席にはべってオランダ語を口にしたし接吻もうけていたが、時折りその顔には淋しそうな表情がうかんでいた。

其扇は、姉と同席するのが気恥しかったが、その日は千歳の姿はなかった。宴は、なんの目的でひらかれたのかわからなかったが、遊女は多く、大きな食卓に皿が並べられ酒類の瓶も置かれていた。

商館長をはじめ館員たちが席につき、ガラスの杯をあげた。其扇は、他の遊女たちとともに館員たちに身を寄せた。

皿の上には油で揚げた魚、浜焼きの鯛、猪の腿肉を焼いたもの、鶏肉、卵、海老のスープ、菜などがとりどりに盛られている。また他の食卓には、紙をつけて焼いたカステイラと称する菓子や卵と小麦粉を水でねりまぜて引きのばし縄のようにひねって油で揚げたスベレッツという菓子もあった。

オランダ人たちは、遊女の関心をひこうとしてしきりに菓子をすすめたり、赤い酒を杯にみたくして飲むようにという仕種をしたりする。遊女たちは、その酒をオランダ人の口まねをしてウエインと呼んでいた。

席がにぎやかになって、オランダ人たちの顔は赤らんだ。開け放たれた窓からみえる長崎の港は暮れ、海岸に点在する家々に灯がちらつきはじめていた。